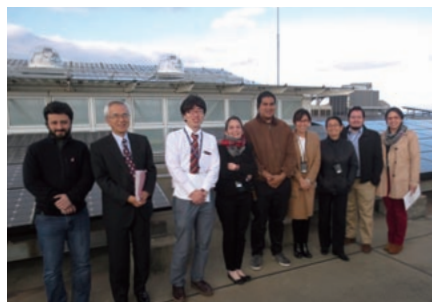




株式会社福岡エネルギーサービスで、地域熱供給事業の模型を見ながら説明を受ける研修員たち



新日鉄住金エンジニアリング株式会社のゼロ・エミッションビル化への取り組みを視察した研修員たち。ビル全体で二酸化炭素排出量を3割以上、使用エネルギーも4割削減した事例だ

近代日本の遺産を世界の省エネに生かす

国産資源の少ない日本にとって、消費そのものを減らすことは資源確保の重要な手段だった。

「持続可能な開発」が注目される今日、

日本の省エネ技術は世界のあらゆる場所で役立つ可能性を秘めている。

その技術を各国に伝える取り組みが行われているのが、福岡県北九州市だ。

[福岡県]

北九州市



北九州市

福岡県北九州市

人口約95万人を数え、3大都市圏以外で初の政令指定都市。戦前から4大工業地帯の一つとして近代日本の産業を支えた。かつて日本最大の鉄鋼生産拠点だった官営八幡製鐵所は今なお稼働中で、ユネスコの世界文化遺産にも指定されている。

学んだ知識をもとに、試験問題に挑む研修員たち。省エネ研修では、実践的な知識を伝えることにこだわっている



福岡県の洞海湾に面する若松区の響灘地域は、環境調和型のまちづくり事業「北九州エコタウン」の拠点。数多くのリサイクル企業が集積し、風力発電設備などの再生可能エネルギーを活用している

日本の玄関口から産業の柱へ
発展を支えた鎮西の都

韓国の釜山までわずか200キロ余り。ユーラシア大陸との距離が近い北九州地域は古代から日本の玄関口として繁栄し、異文化の交流の場となってきた。那大津（現在の博多）は遣隋使や遣唐使が中国へと旅立つ港であり、太宰府は中国・朝鮮半島との外交・通商の拠点として築かれた行政機関が地名の由来となっている。近代に入ってから、中国から輸入される鉄鉱石と筑豊炭田で産出する豊富な石炭を背景に、官営八幡製鐵所が操業を開始。日本重化学工業の一大拠点「北九州工業地帯」として、日本の近代化に大きく貢献した。

戦後も鉄鋼や化学、窯業、電機・機械、自動車などで日本の高度経済成長をけん引した北九州工業地帯だが、繁栄には大きな代償が伴っていた。公害だ。工場の煙突から煙がたなびく、七色の空は産業発展の象徴だったが、同時に国内最悪レベルの大気汚染の原因ともなった。工場が立ち並ぶ洞海湾も工場排水の影響で汚染が進み、船のスクリューが溶け、大腸菌すら生存できない、死の海となった。この状況に危機感を持った北九州市では、市民・企業・行政が一体となって公害対策を開始。汚染物質の排出を減らすだけでなく、省資源や省エネルギーを通じた環境負荷の軽減にも取り組んだ。こうした努力の甲斐あって青い海と空を取り戻した北九州市は、今も引き続き環境保護を強く推進している。

ギョ消費の拡大と切り離せない。しかし、より多くのエネルギーを供給することは、発電のための設備投資や環境負荷の増大を伴い、さらには利用者が支払う料金にも跳ね返ることになる。民間の省エネ振興は、同じ投資で多くの人がエネルギーを利用できるようにするための有効な手段なのだ。

昨年までの5年間で、39カ国から延べ88人が民生部門の省エネルギー技術研修に参加している。それぞれに事情の異なる各国からの参加者だが、共通して好評なのは市内の省エネ事例見学だ。JICA九州が置かれ、研修員の受け入れ拠点でもある九州国際センタービルを題材に、研修員が省エネ診断を体験する演習も人気がある。その他、一般市民の省エネ意識を高める北九州市の取り組みや、スーパーマーケットが小額投資で実現した省エネ事例など、官民間わずささまざまな取り組みを学ぶ機会も提供している。

研修の仕上げとして、参加者は北九州



株式会社安川電機では、ロボットがロボットを製作する工程を見学した。ロボットの活用は労働人口減少の処方箋となるだけでなく、作業の効率化による省エネも期待できる

先進国は近代化に際してさまざまな「無駄」を経験し、それを克服することで、より効率的で環境に優しい技術を生み出してきた。その知恵を活用すれば、多くの人にクリーンエネルギーを届けることも可能となるに違いない。